百年たった今、何が“世界初演”なのでしょう!?

ちょっとマニアックな人のために

MADAMA BUTTERFLY

（注・楽譜○参照）につきましては、ホームページをご覧になられるか、資料をご請求ください。請求先、ホームページは、一面の東京ニューシティ管弦楽団事務局、または、お問い合わせ欄をご覧ください。

明治時代の半ばごろ**戯曲**「蝶々夫人」を見たイタリアの作曲家プッチーニは、これをオペラにしたいという強い衝動に駆られ、発明されたばかりのレコードを利用し、沢山の日本の旋律（**注1**）や、日本にしかない色々な音色をふんだんに取り入れた、日本情緒豊かなこのオペラを作曲しました。日本に来たことの無い彼にとって、日本の寺の**釣鐘の音**や**鉦**（キン：寺で僧侶が経を読みながら叩く大きなお椀形の金属）、**鈴**（リン：家庭にある仏壇に備えられたチーンと鳴らす小さいお椀形の金属）、**風鈴**等は、初めて聞くとても印象深い**かね**の音で、彼はこれらの音に、全曲を通じて大きな役割を与えています。彼はそれらの音を大変気に入り、その名前すら分からないまま、***‘大きな日本の鐘’‘小さな日本の鉦’***等といった彼なりの**楽器名**をつけて何とかそれらの音色を曲中で効果的に再現させようとしました。しかし日本に関する知識の無い外国人の指揮者やオーケストラにとっては、それらがいったいどのような**楽器**なのか、どのような音色を出せばよいのか理解するすべも無く、残念ながらまるで的外れな楽器が使用されたまま、プッチーニのせっかくの思いは今まで***一度も実現されたことなく***百年の月日が流れました。しかも本来音程など無いこれらの**かねの音**に、有り余る才能のいたずらか十二音の音程まで与え楽器として扱ってしまったがために、（現実にその様な楽器などありえなかったため）日本国内における公演ですら、彼の思いを実現させることを不可能にしてしまいました。しかし百年経った今、その***眠りを覚ますべく***

東京ニューシティ管弦楽団は4種類のかねを創り
初演百年目でついにプッチーニの夢を
世界で初めて実現させました！

日本の寺の釣鐘の音
TamTam Grave
を創りました！

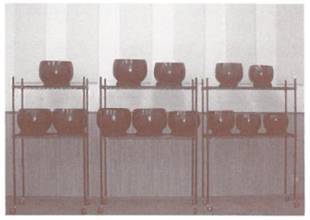
寺の釣鐘から中国の銅鑼の音が!? 蝶々さんが、結婚式を前にして愛する夫ピンカートンの信ずるキリスト教に改宗した事で激怒した叔父の**僧侶**が、結婚式の最中に袈裟をまとって彼女をなじりに来る場面で、プッチーニは、**僧侶**の怒鳴り声「蝶々さん!」に呼応して**仏教を象徴する寺の釣鐘の音**を鳴らし、キリスト教に対抗する山場を設定しています。（**根拠は注2 楽譜①参照**）しかし外国の劇場ではその宗教上の意味が理解できないためでしょう、何と‘蝶々夫人’と何の関係も無い中国を象徴するあの**ジャーンと鳴る銅鑼**（TamTam）を代わりに響かせてしまい、それによる場の盛り上がりが満喫されているのです。袈裟をまとった日本の僧侶と寺の鐘の組み合わせのところで、代表的な**中国の音**が大きく鳴り響いてしまっては、その場はもちろんぶち壊しになり、せっかくのプッチーニの意図も台無しです。もしヨーロッパの劇場で、教会の音が背景から聞こえてくる代わりに、中国の銅鑼の音がジャーンと鳴り響いてきたならば、すぐその場で大ブーイングのため公演は中断され、評論家の酷評と共に音楽監督の首がとぶほどの大問題に発展するかも知れません。このたび特注しました**‘寺の釣鐘の音’を使うことにより、初演百年にしてこの問題が世界で初めて解決されるでしょう。**

この件に関しては、もう一箇所同じような問題を抱えています。それは、オペラの最後の部分で蝶々さんがピンカートンに裏切られて自殺をする衝撃のタイミングで鳴る**釣鐘の音**についてです。今まで慣習的に、直前の、悲劇を暗示する急激な音楽の盛り上がりの頂点で、唯一の独奏楽器として**中国の銅鑼**（TamTam）**が効果音としてオーケストラピットの中から**鳴り響いてきました。音楽はドラマチックに盛り上がり、一見プッチーニの思惑どおりでお客様も涙・・・というシーンですが、本当に彼は日本の悲劇の頂点で無関係な中国の音を使ってその場を盛り上げたかったのでしょうか**?!**残念ながらそうではありません。本当は、夫に裏切られた結果仏教信仰に戻り、仏壇に手を合わせてから自らの命を絶つ（ト書きの指示）蝶々さんへの同情と、ピンカートンへの怒りの表現のために、日本を象徴する**寺の釣鐘**の強音（*ff*）を独奏楽器として**舞台の背景から**鳴り響かせ、悲劇の頂点を締めくくらせようとしたのです。その方が、ドラマとしてはるかにつじつまが合うばかりか、総譜からもその意図がはっきり読み取れるのです。（**根拠は注3 楽譜②参照**）このようにプッチーニの意図とは異なる**誤った百年間の演奏習慣**に従うか否かにより、この**山場の印象**は、**全く異なったもの**になってしまうのです。

十二音に調律された仏教を代表する鐘
‘鉦’（キン）（写真）
TamTam Giapponesi
を創りました！

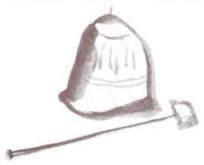
二幕二場冒頭の間奏部分では、長崎港に帰って来たであろう夫ピンカートンが自分のもとに戻って来ることを期待と不安が入り混じった気持ちで待っている、けなげな蝶々さんの心理描写が描かれています。ここでは**教会の鐘（チャイム）**と、日本の**寺の鉦**（音程付き）とが初めて同じメロディーを仲良く一緒に奏でるというアイデアによって、一幕で彼女を悩ませていたキリスト教と仏教との対立が彼女の心の中で次第に解消され、平穏な生活を送っていることが、暗示されています。（**根拠は注4 楽譜③参照**）

この**鉦**は、世の中に音程を持った楽器としては存在していなかったため、世界中で初演以来百年間やむなく無視（このパートは演奏されない）され続けておりました。これらが使われていない今までの演奏では、この重要な意図は表現できず、誰からも気づかれること無く見過ごされてきたのです。今回この楽器が**世界で初めて特注され**使用されることにより、一幕の各所で、当時の日本情緒を大いに醸しだすことに役立ち、二幕では前述のように仏教的雰囲気が漂う楽器として、**大切な役割**を与えられています。



一幕終曲のピンカートンと蝶々さんの素晴らしい**愛の二重唱**では、歌を含め、全ての楽器が弱音（*PP*）で書かれている所で、この鐘（**寺の鉦**）だけが強音（*f*）で書かれています。（**楽譜④参照**）このことが示すように、曲中とても重要な役割を持たされていることは明らかであり、この有無で曲の雰囲気には大きな違いが生ずることは自明のことです。しかし前述のように、その大切な音はここでもやむなく世界中の多くの劇場から無視されてきました。これに対し近年、苦肉の策として、無数に製造されている**タイの銅鑼**の中から比較的音程の正確そうな十二音を選んでこれに代用することが一部で慣習化されつつあります。しかし当然のことながら、これらからは日本の音色というよりも、東南アジアや中国の色合いの方が強く感じられ（Gong Cinesiの代用として歌劇「トゥーランドット」でも中国の雰囲気を出すために使われています）、プッチーニがもともとこれらを日本的雰囲気や、日本の仏教的色合いを醸し出すために使っていることを考慮すると、その目的が達せられない以上残念ながらふさわしい代用楽器とは言えません。今回特注した**日本の音；十二音に調律された寺の鉦**により、初演百年目で初めて彼の**望んだ日本の音色が実現**したのです。

4種類の音程に調律された4個の風鈴
Campanelli Giapponesi
（小さな日本の鐘）
を創りました！



一幕の初め、結婚式が始まる前の場面で、ゴローが障子をあけたり閉めたりしながらピンカートンに家の隅々の説明をしています。縁側には結婚式のために親戚の人たちが大勢集まっているというそんな時に、開け放された家の中から聞こえてくるかわいらしいチリリンリンリンと鳴る**‘小さな日本の鐘’**といえば、日本人ならすぐに**‘風鈴’**がイメージされるでしょう。（**楽譜⑤参照**）それを理解できなかった当時の世界的巨匠が、訳が分からず苦し紛れにビブラフォーンで魅惑的な西洋の音を奏でてしまって以来、同様に困っていた世界中の劇場が右に倣えとなり、今も世界中で**奇妙な**日本が鳴り響いています。日本でもさまざまな代用品で演奏されて来ましたが、今回初めて待望の**本物**がお目見えします。一オクターブ離れた**二組の風鈴**（ドとミ）のかわいらしいハーモニーをご期待ください。

A音（ラ）に調律された、仏壇の中にあるチーンと鳴らす小さな鐘；
鈴（リン）Campanella
を創りました！

二幕の冒頭部分で、お手伝いのスズキが蝶々さんのために仏壇の前でお祈りをしながら、その中の**鈴**（リン）を鳴らす場面が出てきます。日本人なら誰でも知っている習慣ですが、仏教の事にうとい海外の劇場では、日本式のお祈りも**鈴**（リン）のこともほとんど分からないまま、仏教とは無縁な幾種かの鐘の音を鳴らしてきました。極めつけは、ある有名指揮者が祈りの時の鐘だからか、教会の鐘用のチャイムを使っていたことです。**仏壇から教会の鐘が!?**

これがとても滑稽な間違いであることを世界の人たちに気付いてもらうためには、**本物の鈴**（リン）の音を他の楽器同様日本から世界の劇場に向けて発信していかなければなりません。今まではプッチーニが、決まった音程が無いはずの**鈴**（リン）に間違って**A音**（ラ）を指定（**楽譜⑥参照**）したがため、日本国内ですら、彼の理想はほとんど実現されずにきましたが、私共はこの度この壁を乗り越えるべく、**A音**（ラ）に調律された**鈴**（リン）を調達し、**普及**に向け歩みだしました。

東京ニューシティ管弦楽団は、日本のオーケストラとして、上記のごとくプッチーニが切望した**‘日本の音**による**日本情緒の表現’**を真に理解し、これを叶えさせることこそが、世界中でただ日本人にのみ与えられた使命であることを強く認識しております。この度その実現のため、日本国内はもとより、世界に向けて**‘本当の「蝶々夫人」の音’**を発信すべく、このプロジェクトを開始しました。その噂を聞いた海外の劇場や楽器店等からも既に問い合わせが来ています。至極当然なことで、その噂が広まれば一気に世界中に普及し、**初演以来続いてきた数多くの音楽上の問題点が**初演後百年（2004年）たってようやく**国内外で解決に向けて進み始める**ことでしょう。

［文責　内藤 彰］